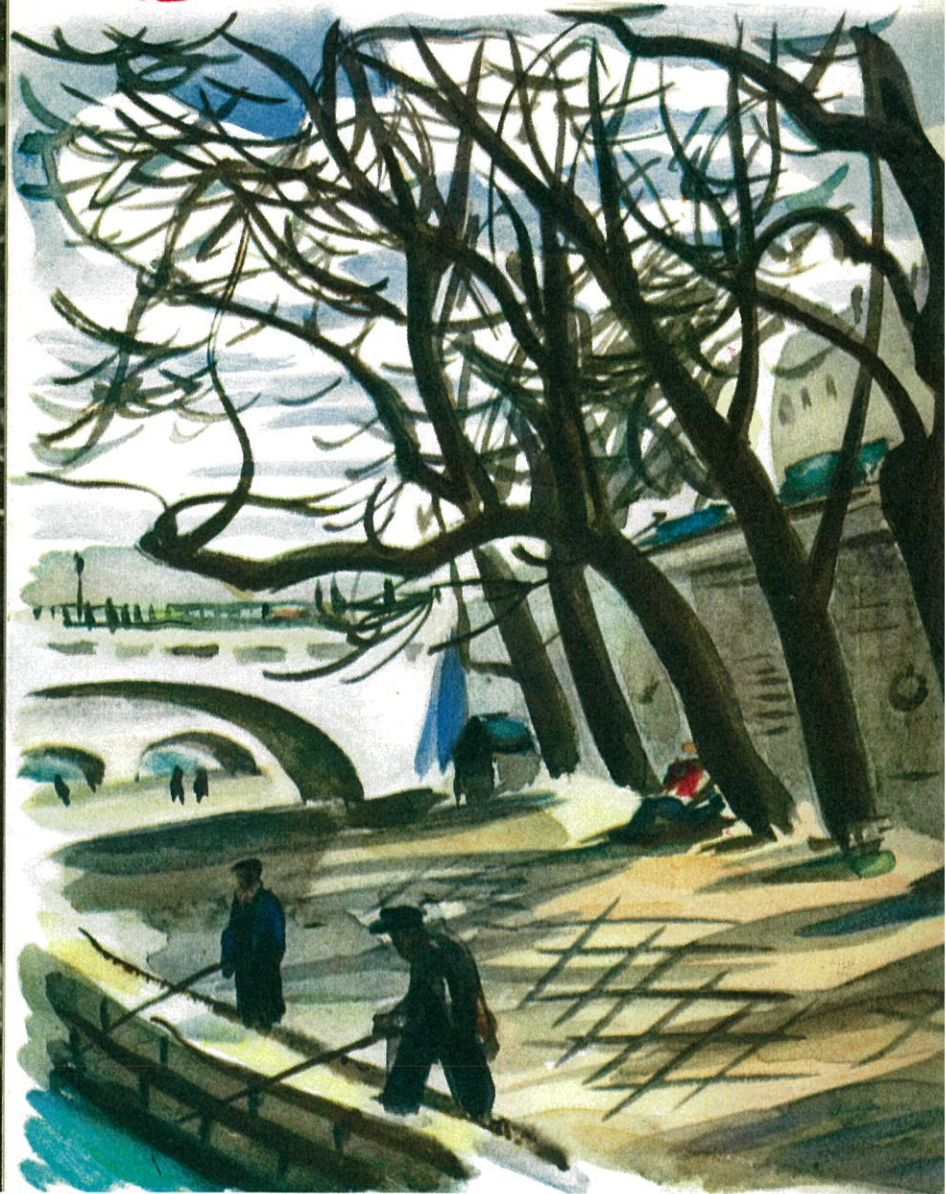


# Bonbon



## フランス女百態

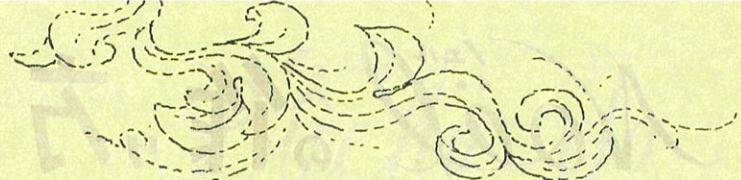
——もともとフランス風の Classique——

フランスの音楽はいつも十八世紀のルイ王朝華やかなりし頃の古典にあがられています。なんといってもフランス人は古典的です。

ルイ十四世の寵愛をうけたフランソワ・クーブランはクラヴサンの名手でした。そして優雅で繊細な澄みわたった感覚をもった曲を作りました。

そのクーブランに *Les folies Françaises ou les Dominos* フランス女百態「仮面にちなむ」という十二の短い曲を集めた画集のようなクラヴサンの作品があります。それぞれの曲に色分けした目隠し（ドミノ）の名がついていてフランス女の特徴を告げてゆくというわけです。例えば第一曲が白い仮面で「処女」とか、第二曲がバラ色の仮面で「貞操」とかいう具合

村田 武雄



です。紫が「懶さ」とか、混色の仮面が「媚態」、緋色と枯葉の仮面が「老いた粹人と姥楼」、灰鼠色が「無口なやきもち」など実にしゃれた又うがつた題名がついています。又それがどれも気のきいたエスプリにとんだ小品なので、弾いても聴いても思わずこそばゆくなるほどです。残念なことこの曲はレコードに断片しか入っていないのですが、もっともこれはピアノでは重くなって面白くないので、やはりクラヴサンの艶っぽい音色でないと味が出ませんから……。

フランスの音楽はお菓子でもそうですが独特な好みがあります。それはどんな形容詞でも表わし得ないでしょう。味とか匂とかいう外にないのです。この曲をクラヴサン奏者のエタ・ハリッヒシユナイターさんがテレビで弾いたことがありました。

私―「なぜクラヴサンはピアノの白い鍵盤が黒くて反対に黒い鍵盤が白いのですか。逆ですね」

ハ女史―「白魚のような指をした貴婦人が弾くのに白い鍵盤が多くては少しも美しくないじゃありませんか。黒い鍵盤の上を真白な指が踊るのは神秘的でしょう。ピアノは現実的ですが……」

私―「それでルイ王朝時代にこのクラヴサンが流行したのですね」

ハ女史―「これがフランスの味、ちょうど日本のお琴をほかの楽器でできないような味です。クラヴサンの音はフランスの音と違ってよいでしょう。エレガンで気品があつて……。このクーブランの曲はフランスの婦人の気持をよく知っていないと弾けません。曲の流れよりも音の感じ方がすべてですから。とてもシャルムな味の曲です。音がシャルムなのですよ」

もう数年前の放送での合唱ですが妙に頭にこびりついています。魅力的な音―これはフランスの音楽の生命のようです。きれいな音ではなくて、たとへしゃがれ声でも魅力のある音がフランスの音楽に独特なものを与えているようです。これはただにフランスの音楽ばかりではなく、フランスのものすべてにいえるのではないのでしょうか。

(音楽評論家)

